

松任谷正隆の

僕のひとりごと

05

VOL.05 ライバル

まだまだ昔の家の話は続く。あれは小学校5年くらいになった頃だったか。

僕の天敵だった淳子ちゃんはどこかに引っ越していき、うちの前の畠は造成が始まり、ついには家が何軒も建った。

広々としていたうちの前の風景は一変し、やたら圧迫感のある住宅地になった。

いやだなあ、とも思ったが、どこかワクワクもしていた。

淳子ちゃんのような生意気な女ではなく、もっと可愛い女の子が越してくるかもしれないのではないか。

案の定、目の前の3軒あるうちの真ん中の1軒には、僕よりちょっとだけ年上であろう姉妹が両親と共に越してきた。

しかし、淳子ちゃんの家みたいに親も親しげではなかったし、子供も親しげではなかった。

なんだか、どこかに一線を引いているようにも見えた。

都会の孤独、というか、干渉しない関係、というのを初めて感じたのがこの家だったと思う。

そのせいか、ちょっとだけ憂鬱になったのがピアノの音だ。



それまでは畠に向かってどんなに遅い時間にでも
ピアノの練習が出来ていたけれど、
目の前に出来た家には当然聞こえるはず。
なにしろ、ピアノの部屋は細い路地を挟んで、
その家に面していたからだ。

ところがある日、ポロポロとピアノの音が
向こうから聞こえたのだ。
その音の大きさから、向かいの家のピアノの部屋も
路地に面していることが容易に想像が出来た。

さあ、またしてもライバルの登場である。しかも、今度は顔も見せない、挨拶もしない陰険なやつだ。
しかも、女子の常で、指裁きはやたら上手いと来ている。

練習している楽曲も、僕がまだソナタあたりをうろうろしているときに、
向こうはショパンなんかを弾いている。うーん、困った。
僕はこんなやつに遅れているところを見せなければならないのか・・・。
とはいって、レッスンは火曜日と決まっているから、
それまでにはおさらいをしておかなければならない。
しかし、聞かせたくない。



こうやってギリギリまで練習をせずにレッスンに出かけるという、けしからん毎日を送ることになる。
そして僕は先生に言った。「僕にもショパンをやらせてください」。かくして僕もショパンを始めることになった。

音を出さずに譜面をひっそりと読み、指だけ動かしてカラで練習をする。
そしていよいよ、見えない同士の対決となる。
向こうのピアノの音がやんだと思うや否や、こちらが練習を始める。
こちらが一息つくと、向こうが始まる。
意識し合っているのは見え見えだ。しかも向こうは、
こちらと同じ曲を弾き始めたりするのだ。
本当に嫌味なやつだ。またマウンティングかよ。



結局このバトルは向こうが越していくまで、たぶん4~5年は続いたはずだ。
今思うと、この姿を見せない敵さえいなければ、
僕はもっとピアノが上手くなっていたと思う。
いや、そういう問題ではないか。
むしろ、僕が自分の自意識過剰をもっと早くに気付くべきだったのだと思う。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。
4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。
20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、
バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。
その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。
鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。
2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。
日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。
著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy